三高終焉のころ（続）（2・8・18）

久米　直之（昭5・理甲）

今日は言葉に気をつけて物を言はねばならん大先輩の方々が居られんやうでありますから、気楽に話をさしてもらひます。暑い最中わざわざお出かけ下さいまして、こんなつまらん話を聞きに来てくれる諸君も、物好きやなあと思ふ。そりゃあまあ、教師と弟子といふ誼みに免じて暫く相手をして聞いていただきたいと思ひます。最初に、私が無理やりに生徒課をやらせられるやうになる原因を作った中山治一教授が予てからご病気だったんでありますが、七月二十五日に亡くなられました。中山君といふ人は、前回申し上げたやうに、非常に良く出来た方でありまして、私等と違って学者でもあるし、同時に何て言ひますか、芯がありながら表面は非常に穏やかな方でありましたので、生徒課の主任といふガキ大将としては、非常に適任の人であります。不幸にも寮が焼けた為に、これ幸ひと責任を取って辞めてしまった。これは諸君にとっても誠に不幸な偶然でありました。そこで教授会で選挙といふ事になりまして、アイツにやらせろと言ふ、丁度私

が三高教授会の中では、尻から数へた方が早い位の若僧でございましたのでやらせられたのであります。その中山君は私より、三高は一年か二年後の筈でございましたけれども、三高を辞められて直ぐその四月から名古屋大学へ呼ばれて行かれた。その位学者としても非常に優秀な方であったわけで、慎んでご冥福をお祈りする次第であります。

今、井垣君が変な事を言ひましたけれども、この四月の話で、私は私なりにちゃんと結末をつけたつもりで居ったんであります。ところがひとつだけ喋らないで置いた事がありまして、それを奥田会長先生が、ちょっと聞き咎められて、「アレを言はねばあかんやないか。」とかう言はれまして、それからそれも聞き流しておけばよかったんでありますけども、何かとうとう再び醜悪な顔を諸君の前に曝さなきゃならんといふ事になりました。残念と申しますか、困った事と申しますか、まあしかし聞きに来て下さる人が、まさかこんなに沢山居られるとは思ひませんでしたので、恐縮しながらも性懲りもなしにここへもう一度出て来ることになりました。実を申しますと自分にも多少皆さんの前でいろいろの事を申し上げるのは、これが最後だと思ふと、これも喋っておきゃあよかったと思ふやうな事が一、二ございまして、それが自分の気持の中でやや圧力となり、加へて井垣君の圧力と相乗的に働いて今日ここへ出て来たわけであります。

自由寮が焼けたのは昭和二十三年一月二十六日でありますが、それから落合校長はじめ野口事務官、それから中山生徒課主任といふやうな方が文部省に対して責任を取る手続きをいたしまし

た。発令は三月三十一日でありましたんで、私は二十三年の四月一日から二十五年の三十一日迄、丁度丸二年、生徒課を預かる事になったわけであります。

最近この四月二十一日のラッシュテープをもらひましたが、私も八十を越して、声が嗄れてしまひまして、誠に聞きにくい。その上テンポが遅い、いらん事ばっかり喋っているといふわけで、誠に気が引けるんでありますが、今日もそこいらの所はご容赦願って、一時間余りおつき合ひを願う事にしたいと思ひます。

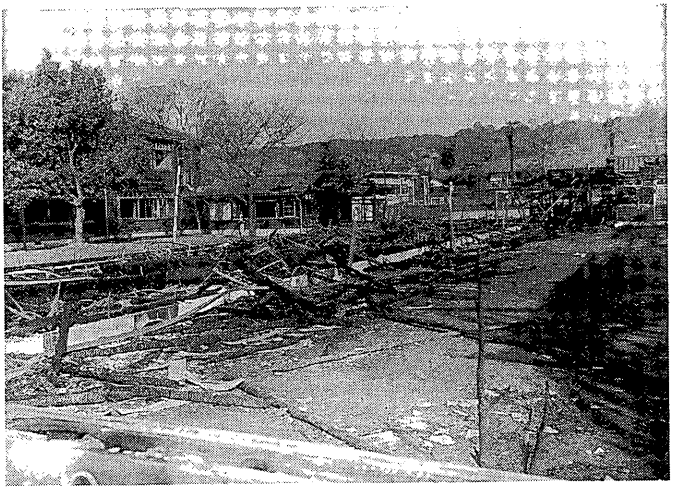
今日はそこでどんな事を喋るかといふ事になります。前回には先を急ぎましたので、寮の焼けた後始末の話はほとんど致しませんでした。これは面白くも興味のある事でもございませんけども、今から約四十年以上も前の特に貨幣価値等との関係で、当時を思ひ出すよすがにはなるかと思ひますので、そんな事をちょっとお話しいたします。それから後、学制改革になりまして、三高がどうしても存続出来ないといふ事がわかって、止むをえず、京都帝国大学と合同で、新しい京都大学を作るやうになったそのいきさつの事を省略しましたんで、その話を少し致しまして、最後は二十五年三月三十一日の三高の死水をみんなで取りました時の事をお話したい。

◇　自由寮燃ゆ

私等が三高生であった頃、即ち昭和の一桁の初めでありますが、その頃寮の受付に、木村君と

藤田君と言ふ二人の中年のおっさんが来ました。二人とは、その後ずうーと私は公私にわたり付き合ひがあったのであります。そのうちの一人が藤田菊蔵、通称阿弥陀二世、阿弥陀の事は諸君もよくご存じだと思ひますが、この阿弥陀は三高に二十数年勤め、その後京大教養部の職員になり、亡くなる迄勤めてくれたんでありますが、家は東寺の南のところにあります。三高へ出勤するのには、市電で一時間前後かかるわけです。彼は一月二十六日の晩は非番でありまして、翌朝六時頃に家を出て近衛で降り、東北の角に京大の学生集会場といふ、まあ今はいろいろなくなった部分もありますが、京大の学生集会場の門を入りましてすぐ、塀添ひに三高の陸上競技場の西南の隅へ出るわけです。彼はいつものやうにそこへ入って来て、曲った腰を伸ばしてあゝヤレヤレと東の方を見たところ、目に飛び込んで来たのが大文字山であります。寮があると大文字山は見えにくいのです。彼はびっくりしてどうしたんだらうと思って、目を落として見たら寮が無くなってゐるのです。彼は雪の上、グラウンドの陸上競技場の雪の上に尻モチをついて、へたばって居ったのでした。彼はその話が出る毎に、「もうほんまに、こんなびっくりした事おへなんだデェ。」と言って彼は涙を浮かべるのであります。彼は三高へ来てから新聞を読みますので、何も知らずに来たのですから驚いたのも当然です。その驚きといふものは全三高の驚きであったわけであります。

三高は昔から、全く火事のない所でありまして、明治元年の舎密局以来失火といふものを経験



自由寮無惨

左の建物は北舎(外郭を残してゐる)。中舎は完膚なきまでに焼けた。右の影は南舎。(林顕彰君撮)

してゐないんであります。引き合ひに出しては悪いんですけど、京都大学では、まあ世帯も大分大きいですけど、年中行事のやうにして大きな火事があります。ある時は図書館が、又あるひは中央実験所が、そして薬学の本館が全部焼けてしまったりといふやうな事が、次から次とあったんでありますが、三高にはさういふ事がひとつもなかった。それが最後にえらい事をやったわけです。これはしかしどうも新制に移行する時に、我々がいろいろと悩み考へして居りましたのに、「グズグズするな」と言って、天が我々に最後の決意を促してくれたのではないかといふ気もして居ります。この寮の後始末でありますけども、あの寮は私共が

おりました所謂旧寮とは違ひまして、昭和九年に室戸台風で旧寮がやられまして、時の溝渕校長が急拠上京されまして、陸上競技場のところに寮を建てるといふ事を文部省と交渉されて実現したものです。

当時は満州国が出来たりしまして、金が沢山要った時でありまして、そんな時に高等学校の寮なんてものに何十万といふ金を出す事は、これはなかなか出来ぬ状況にあったやうでありますが、それを実現して昭和十二年の暮か十三年に出来たのであります。自由寮は総建坪が一、一七八坪、二階がありますので総坪数にしますと二、〇三八坪。この建築費が総額二十万三千円といふ、今から考へるとここへ来てをられる諸君の俸給の、二分の一ないし三分の一位じゃないかと思ひますが、そして、焼けた時に建築士さんに試算してもらってるんですが、二十三年一月の時価にしてだいたい四千万円位だらうといふ事ださうであります。寮の後始末についてのいろいろの計算の基礎は、この四千万円といふ数字を基準にして、考へていたゞくとよろしいかと思ひます。勿論これは、前回にも言ひましたやうに、生徒が一人残念ながら命を落して居るのでありまして、まあ、さういふものはこの中には勿論入っていないわけであります。

焼け出された寮生の落ちつき先や身の廻りのほか、緊急に樹てねばならぬ対策や問題も山積してゐますので、失火対策委員会といふのを作って、いろいろの事をやったわけです。その当時、寮生は登録してゐるのが百七十八人〃実際寝泊りして居ったのが百十七名でありました。そのう

ちで、中舎が一番よく焼けましたので、中舎の寮生は、ほとんど全部丸焼けであります。何も持ち出す事が出来なかった。それから、北舎と南舎は多少余裕がありましたので、持ち出せた物もあったといふ事であります。そして差し当って、その被災寮生をどうするかといふ事で、これは旧寮の南舎に、部屋が五つありますけども、取りあへずそこへと、また運動部が校内にボックスを持って居ります。そのボックスに、臨時に畳を敷いたりして、そこへと。それから共済会ホールの二階に、二十畳敷位の部屋がありましたが、そこへ若干と、武道場の中に準備室みたいな小さな部屋が、二つか四つかありましてそこへと。更にアメリカの宣教師ミュレットさんといふ人が三号官舎に居られましたが、ここに十人ばかり収容してくれまして、それで当面被災生の寝ぐらだけは出来たわけです。ただ校内の各部屋には電灯がありませんので、夕方になると蠟燭で明りを取るより他仕方ありません。しかも寒い最中でありますから、その苦難たるや正に筆舌につくし難いとでも申しませうか、大変なことでした。僕も本拠を寮に置いとったんですけども、寮には何も置いてなくて、生物教室へ布団を持ち込んでありましたので、幸ひ災難には遭はずに済みました。

かう言った応急対策の中心になったのが、中山君と野口事務官であります。いろんな事をやってくれましたし、市や府から応急の救恤品と言ふのが、毛布・シーツ・枕とか、さういった物が若干来ましたけれども、これ、現在ならば恐らく無料で、みんな被災者に渡るんだらうと思ひま

すが、その頃はまあ日本の政治は、しみったれて居りまして、毛布一枚千円とか、布団一組千二百円とか、さういった値段がついてゐるのであります。それを学校が払ふか、あるひは個人が払ふかしないと、やって来ないのであります。そんな不自由な事をその当時、寮で災害にあった諸君は、みな耐へて味はって下さった事になるわけでありますが、学校には、聞いてみると金も物も余裕は何もないのであります。高等学校の経費といふものは、大学と比べますと、比較にならん位貧弱で不自由なものでありまして、言はゞ全くの着たきり雀であります。高等学校にはさういふ金の余裕も全くないといふ事でありまして、学校側の苦心も大変なものであったわけであります。火事とは関係ありませんが、紙が無くて会議に困ったといふ話は、この前にお話をしました。その他、一般生徒及び先輩方から、見舞金を直ぐ戴けるようになりまして、これが二月四日現在で十一万八千円になりました。また大正十二年九月、関東大震災で、一高が全焼しました時に、三高生の有志が急拠見舞金を集めまして、それを当時の生徒総代だったか、寮の総代だったかの堀江保蔵先輩が、これを持って東京へ行って一高に届けた。金額は今ちょっとわかりませんが、今から考へると非常に手早く一高へ届けたんであります。それが非常に一高の諸君の魂を揺さぶったと見えまして、その後一高の寮総代の大槻文平といふ、現在日本の経済界の大御所みたいな人の一人のやうでありますが、その大槻文平氏の名前で礼状が三高へ来て居ります。それは同窓会に保管されてゐるやうでありますが、びっくりする位達筆でありまして、堀江先生が三高

の代表的な能筆家でゐられるのに対して、一高もその代表的な達筆で礼状が来てをって非常に見事なものであります。一寸余談になりましたが、さういふやうな経緯もありまして、一高からは直ぐに約五万円弱の見舞金が送られました。その他大谷大学・桂の女専とか、あるひは山形高等学校の寮生一同とか、さういった暖い心のこもった義捐金がこれが三月末で、九万二千円強であります。

話が飛びますけれども、寮の焼けた事の責任を取って、校長以下が、進退伺ひを出しました。それに対する処分令が八月三十一日付で参りまして、落合太郎校長は譴責、譴責といふのは、かなり大きな処分のやうであります。中山治一生徒課主任と野口義人事務官は戒告、まあこの三人を処断しました事で、文部省側の責任者に対する処分が終った事になって居ります。生徒一般に対しては、寮生一般に対して、校長の名前で二月七日付で「一年間自由寮の閉鎖を命ずる。」といふ、自由寮がないわけでありますから、まあかういふ処置が取られたんでありますが、これは八月三十一日に責任者の処分が決まりましたので、その後、一年間といふのを繰り上げまして、この年の十月の終り、十月の三十日だったと思ひますが、解除になり、第80回の紀念祭を同窓会全国大会と兼ねて尚賢館と新徳館を連ねて開催しました。これに出られた方も沢山居られるかと思ひます。寮の話はこれでだいたい片がついたのでありますが、実はこのあと、私は中山君のあとを次いで生徒課主任といふ事になります。

この前にも言ひましたやうに、私は諸君と一緒になってグラウンドを走り廻ったり、ラケットやバットを振り廻したり、さういふ事をする点に於いては中山君よりは、はるかに自信があると思ふんですけども、中山君の持って居ったやうな人徳が僕にはありません。その他いろいろと欠点だらけであります。それで困って、選挙で私が生徒課をやらんならんといふ事に決った直後に、中山君に主任業についての指針を請ふたんです。中山君は非常に懇切丁寧に、約三十ヵ条位の、いはばマニュアルを実に微に入り細をうがって、教示してくれたのであります。私はそれによって曲りなりに、生徒課を運営して行く事が出来たのであります。それから満二年間生徒課主任をやったのでありますが、その間にありました大きな事と言ひますと、先程来話をしています「二十三年の六・二四ゼネスト」の対策を含めて大小三十幾つあります。概して言ひますと、もうとにかく三高の最後が目の先に見えてをりましたので、生徒の方は自治会が中心になって活動しましたが、それからあとの一年間はどうしたわけか、自治会の役員といふのが、一月毎位に繰り返し替るのです。後から考へてみると、さういふ自治会の委員訓練を施しておったんじゃなからうかとでも言ひたいくらゐ、顔も覚えないうちに、又新しい委員が出来て来るといふやうな事が、三年だけしかいない三高生の中でありました。それから生徒自治会のリーダー達に対抗して、自治研究会といふものが名乗をあげ、三高本来の是々非々の態度で、生徒会を運用して行こうといふ立場の諸君が出て参りました。これらの両者の生徒大会などがありますと、論戦は、なかなか

華やかなものでありました。私は中山君みたいに、その中へ割り込んで意見を述べるといふやうな器量がありませんので、もっぱら聞き役でございましたが、概して平静でございました。ところが、この三高の終り頃近くになりますと、C・I・E・アメリカの中央教育情報局（？）といふのでありますが、そのC・I・Eの委員として、イールズといふ、これはしかし学位を持って居る人でありますから、相当の学者だったんだらうと思ひますが、このイールズといふのがなかなかの何て言ひますか演説好きなんですね。あっちこっちの大学へ行っては演説をぶち、そしてその度毎に爆弾宣言みたいな事をやるわけです。それでまあその言動と、彼はアメリカみたいな大きい国からやって来まして、地図で見ますと、わが日本はアメリカのカリフォルニア一州よりも、まだ狭いやうな所でありますから、それで「こんな所で大学が七十幾つもあるのはおかしい、こんなん止めてしまへ、日本には国立の大学といふのは十校あればよろしい。」とぶちあげる始末。十と言ひますと、例の旧帝大といふのが七つありますが、それより他には国立の大学は三つしか出来ないといふ事になります。そこで今度は、それ以外の地方の大学が騒ぎ出したわけです。いつでしたか、二十四年の五月でありますか、イールズが東北大学で講演をしました時に、その丁度、十国立大学案といふので、その全国の国立の大学が色めき立って来る。そこへ授業料を上げろといふ事を又言ひ出した。そこで大騒ぎになりまして、学生が彼の演説を妨害しまして、立往生するといふやうな事になります。これが有名な「イールズ事件」と称するものであります。

このイールズといふC・I・Eのボスと、京都大学の鳥養総長とが、何か知らんけども肝胆相照らしたやうであります。非常にこのイールズを高く買ってゐた節があります。これはちょっとその当時の、例へば三高との交渉にしましても、さういふものがチラチラと出て来るものですから、我々が抵抗するわけです。さうすると鳥養さんは「三高の連中は、わしの言ふ事をちっとも聞きよらん、駄々ばっかりこねる。」といふやうな事を言ひ出すわけであります。

◇　刷新委員會

話がそちらの方へ行ってしまひますけれども、この学制改革といふものが、これはもう避けて通れないといふ事は、終戦直後からわかってゐたやうであります。それはアメリカと日本の代表者との間で数十人の委員を作りまして、教育制度刷新委員会といふものが出来まして、そこで今のイールズ問題なんかも議題に上ったのでありまして、そして、その反対の急先鋒に立ったのは、例へば金沢であるとか、あるひは高知であるとか、あるひは松山であるとか、岡山であるとか、さういったやうな所の代表の方が非常に大きな反対論をぶったといふことであります。それと同時に非常に残念な事は反対ばっかりして居てもあかんからといふので、今度はその、俺のとこは何とか三つの大学のひとつを回して下さいといふ、拝み倒し戦術をやる大学が出て来るわけであります。即ち日本の大学や専門学校の中にですね、反対を堂々と述べる連中と、それから後ろか

ら手を回して、そしてさういふ人に限って、今度は自分の競争相手を悪しざまにののしったりといふやうな事をする人が出て来た。それを落合さんが、度々嘆いてをりましたが、「刷新委員会の中に幇間みたいなのがをって困る」と。そしてこれらの人が一番大きな目の仇にしたのが、旧制の高等学校らしいんです。その中でも特にナンバースクール、一高から八高迄のナンバースクールといふのが、これが日本の今までの教育をダメにしたんだといふ、我々は日本の教育といふものが、あるひは日本の学校教育といふものが、それらの高等学校を始めとする三十幾つの高等学校のそれぞれの個性ある教育方針といふものによって、盛んになって来たといふふうに我々は思っているのにもかかはらず、それの悪口を言ふ人が出て来る。さういふやうなやきもちを今度は又、C・I・Eが巧みに利用した形跡があります。終ひに、これは二十二年十二月二十日頃でありますが、刷新委員会でその時のC・I・Eの代表が出て来まして、「我々は戦争の結果、先ず軍閥をやっつけた。続いて財閥を解体した。今度は学閥である。」我々は学校教育といふものに閥といふものがあったかどうか知りません。少なくとも、三高には三高閥といふものがなかったと僕は思って居ります。即ち先輩と後輩のつながりが非常に強くて、そしてそれがあたかもさういふ一つの一脈の閥のやうな形に見える学校がなかったとは言へません。しかし、他の高等学校は大部分は皆、さういふものは何も持ってゐない。この学制改革のいろいろな研究やら、運動やらをしてをりまして、我々が我々の力不足を痛切に感じざるを得なかったのは、この各高等学

校がその土地の環境条件やら、その土地に昔からある気風やら、さういったものを基にしまして、独自の学風をそれぞれの学校に建てて居る、それはよその高等学校とは相犯すことはないといふものが、自ずからありまして、高等学校の横のつながりといふものが比較的弱かったと言ひますか、ルーズだったと言ひますか、お互ひが「あいつら巧くやって居る…」と知ってをりながら、じゃそれと手をつないでといふ事はあまりなかった。日本の師範教育といふものは、ある一つのレベルに全国一律に教育をするのが目的であります。ところが、高等学校の教育といふものは最終教育ではないわけです。究極の目的ではないわけです。高等学校の教育といふのは、真理は永遠に到達しがたいものであるといふ事を考へて、それに対して日常の我々の努力を進めて行くべしといふふうな教育を、それぞれに皆行なって来てをるのであります。さういふふうなものが、アメリカから見ますと、えらく怖く見えたんじゃないかと僕は後にして思ふんでありますが、結局、旧制高等学校の教育方針なり、あるひは実質的な名前なりを、新制に使ふのを許さない、かういふ事を言ひ出したのであります。「旧制高等学校をつぶせ、なかんづくナンバースクールはつぶしてしまへ。」これがＧＨＱの方針だったのです。

鳥養先生は二十一年から二十八年迄でしたか、二十六年迄でしたか、京都帝国大学、京都大学の総長をやってをられるんでありますが、その時に一緒に仕事をされた事務局長とか、あるひは会計部長、経理部長あるひは学生課長であるとか、秘書室の人であるとか、全部で八人位一緒に

やられたさうでありますが、四十年頃になってから、あの当時我々は非常に苦労したんで、その苦労をした事を、ひとつ記録に残しておかうではないかと、座談会形式のものをまとめまして、それがA5の大きさで、百四十頁位の小冊子になって残ってゐるのであります。これは非売品でありまして、あまり沢山刷らなかったらしく、なかなか目に入るチャンスがなかったのでありますが、私は少し前にそれを読む機会がありまして、鳥養さんの人となりとか、あるひは大学運営の方針といふものについて知る事が出来ました。それを読んで行きますといふと、日本には、高等学校の教育といふものがあった。これは非常に青年学徒を稗益して、立派な教育制度であった。この旧制高等学校の精神といふものは、新しい京都大学の中にも、是非生かさなきゃあならんといふ事を、言葉を強めて言って居られるのであります。自分も、三高の卒業生であるとも言ってをります。それをすんなり読みますと、「わしも三高を出たんじゃが、三高の教育方針は非常に良かった。だから、これは新制の京都大学の中に生かして行きたい。」とはっきり言って居られる。ところがそれが少し後の部分になりまして、実際に三高と新制大学を作るについての交渉を始めてみますと、「三高の連中は嫌じゃ、嫌じゃとばっかり言ふてダダこねて、わしの言ふ事聞きよらん、けしからんと。それだからこそ高等学校がつぶされたんだ。」とかういふ飛躍した議論をしてをられる。ところが、その鳥養先生が言はれた、我々が嫌じゃ嫌じゃと盛んに抵抗をしてをった頃には、三高はすでに無くなる事がちゃんと決ってをったわけです。刷新委員会でちゃ

んと決ってゐたわけです。ですから鳥養さんは何か錯覚をしてをられるんだと思ひますが、我々に新制京都大学を作らうと言って見えたのは、恐らく三高の教育方針が非常に良かったからそれを新制に生かしたいといふのでだと思ひますが、二十二年の九月頃に落合さんとどこか道で会はれて、その時に、三高と一緒にやらんかといふやうな事を言はれたらしいんで、正式には二十二年十二月二十日頃に鳥養さんが、御自身で三高の校長室へ見えまして、落合さんに丁重に三高が京都大学の新制移行に協力してもらひたいといふ事を、言はれたさうであります。実際に、三高に対して京都大学から文書を以て申し入れがありましたのは、二十三年一月十三日であります。本田といふ事務局長と、部局長会議を代表されて、木村廉先生と二人で、新制をやるについて三高が、京都大学と京都帝国大学と協力してくれる事をお願ひすると言って来られたのであります。直ちに教授会が招集されましていろいろ議論をしたのであります。尤もそれ迄に、落合校長が来られる前後から、新制にどうしても入って行かなければならんといふ事を感じまして、委員会を作りまして考へてをりました。新しい新教育制度に入って行くに当って、三高はどういふ方針で行くかといふのについて五つ位の方針が、みんなから出ましたが、最終的にどれをとるかなかなか決らなかったのです。二十二年の夏休みだったと思ひますが、落合さんが「新制についての諸君の意見を簡単でいいから文書にまとめて、夏休みの終り迄に私のとこに出して欲しい」と、宿題が出たわけです。九月の学期が始まってから、落合さんは、統計めいた事は申されませんでし

たけども、話の口裏等を考へて行きますと、どうやら新制高等学校を作るに当って三高は、モデルスクールにならうといふのであったやうです。その頃全国に、やたらに高等学校が出来ましたが、これらは中学校を名前だけ全部高等学校に上げてしまったわけでありますから、これもC・I・Eが、ちょっとやり損ねて、さういふ事になったのでありますけども、高等学校が、昔の中学校の三年迄の学力を持って、高等学校へ入るのでありますから、どうしてもレベルの低いものになる。それでは困るといふので、新制高等学校のモデルスクールになろうといふ意見に、落合さんは傾きかけてをられるやうな感じであったんであります。ところがそれがその年の十二月の終り頃に、旧制高等学校の、特にナンバースクールの匂ひのするやうなものは、絶対に持って入ってはならんと、こういふ事を言はれましたので、落合さんは非常な落胆をされたやうであります。我々も、さうなればどうなるかといふ事を考へてゐる所へ、タイミングよく、京都大学から一緒にやろうといふ事を言って見えた。そしてその時に付け加へて鳥養さんの意向として、三高の良さをあくまでも尊重する、そしてそれを新制の京都大学へ生かして欲しいと、かういふ事が入ってをったさうであります。それではどうしようかとなってゐる所へ、二十六日に寮が焼けた。寮が焼けたので、我々はほんとにショックを受けたわけです。そして止むを得まいといふので、何て言ひますか、やや落ち着きを失った形で、京都大学の誘ひを受け入れるといふ返事を出したわけです。

◇　京大の申し入れ

それから両方の代表が出まして議論が始まるのであります。その上一番の京大のタイトルとしましては、教養教育をするのに、学部とキャンパスが近いのはいかんと、この理由をいくら聞いても鳥養さんはそのいかん理由を言ってくれないで、離れた所でなきぁならん、いかんとだけ言ふのです。ある時は姫路にしようと言ひ、ある時は舞鶴の海軍の跡地にしようと言ひ、で、終ひに宇治の火薬廠にしようといふ事になりました。「宇治っていふとこは広いしええとこや、まあお前らそんな事言はんと一ぺん行って来い」と、かう言って、大学のバスで、我々十人ばかりが今の宇治分校になった所を見に行ったのです。

ところが、行ってみますと、火薬廠といふのは宇治の方へ行く道路から約十米程、坂をダラダラと下る所に、勿論、火薬廠でありますから、乾いた所では危ないので、水のジュクジュク出て来るやうな所であります。私は幸か不幸か、植物生態学といふものに、ちょっと首をつっ込んでをりましたから、道路のすぐ脇に一米位の幅の流れがサラサラと音を立ててゐる。流れてをるのは結構でありますけども、それが道路の面にすれすれである。更にもうちょっと奥へ入って行きますと、そこいらには地面にヨシといふ植物が生えてゐる。ヨシといふ植物は地下茎で増えていくのですが、その地下茎が水につかってないと生長しない、しかもその地下茎といふのは、だい

たい水面もしくは、水面下三十糎位の所に横に広がる性質を持ってをります。従って、このヨシが地面に密生して居るといふ事は、そこいら辺に水がいっぱいあるといふ事であります。勿論、火薬廠でありましたから、コンクリートの道が作ってあります。これはコンクリートの道を作らなければ、自動車も何も入って行けないからです。歩くにもコンクリートの道を離れると、ジュクジュクと、水が湧いてくるやうな所であります。そのうへ、かなり大きな杉の木が生えてゐるのでありますが、杉の木といふものは、神社仏閣等をご覧になるとわかるやうに、あまり山の尾根のやうな辺りには生えていないんです。谷間の所に生える植物であります。その杉の幹の下部、地面から上一米位に亘って、樺色のものが一面についているのです。その黄色のものは、これは非常に珍らしい植物でありまして、藻類、藻の仲間でありますが、アヲサであるとか、アヲノリであるとか、そう言った仲間のもの即ち藻類でありまして、この藻類っていふものはだいたい水生植物であります。水の中に漬ってないと、生長も生殖もしない植物であります。その中でたった一種類だけ陸上に生育する藻の仲間があります。それがその黄色のものであります。肉眼で見たんでは粉をふいたやうに見えますが、顕微鏡で見ますと、細い細胞の連なりがあります。これをトレンテポーリア（Trentepohlia）と言ひますが、そのトレンテポーリアといふ藻類が生えてゐるのであります。

トレンテポーリアといふのは、陸上の藻類とは言へ、これはやはり水が充分ないと生育しない

ので、そのトレンテポーリアであるとか、杉が生えてゐたり、ヨシが路面から上に生えてゐたりする。これは一目で「クロバーの芝生に友と踞し　如意の高嶺を仰ぎつつ…」といふ我々の寮歌の示す、寮生活といふものと、およそ縁の遠い環境である。かういふ事がわかりまして、それだけで宇治の場所といふのは、火薬廠としては好適地ではあっても学園にするには全く不適当であるといふ事を、大学との委員会の席上言ったんでありますが、これはとうとう最後迄大学側の納れる所ではなくて、宇治分校といふのが成立してしまひ、これは非常に残念でありました。京都大学と一緒になるといふ事になって、総長がさう決めた。これはなかなか動かせないんで、宇治分校といふものが二十六年か二十七年に発足しまして、約三～四年続いたのであります。

これで日ごろに我々の主張してをったですね、宇治は学園として適格でないといふ主張といふものが通らなかった。先刻一寸申しました鳥養さんが作られた刷物の中に、いろいろと書いてありますけども、京都大学といふ所は、我々から見ると極めて、広さや大きさといふ物量主義の大学であります。そこには人といふもの、生命といふものについての思ひやりが、ほとんど皆無に近いやうであります。私はある時に、これは岡本総長の時でありましたが、学報の他に京大広報といふ月二回出るパンフレットがありますが、その中に京都大学の事を書けといふんで、私は、京都大学といふ所は、動植物の生命に全く注意を払はない所であるといふやうな事を書いたのでありますが、こんな所でよくまあノーベル賞の先生方が出たなといふふうにも考へるんでありま

す。ノーベル賞の先生方は、これ皆、その前に高等学校の教育を受けてをられる。高等学校時代に、人間としての偉さといふものをやはり身につけられた。その為ではなからうか、何れにしてもそれがひとつの非常に大きな原因であらう。三高が無くなります時に、丁度湯川さんがニューヨークへ行ってをられまして、我邦最初のノーベル賞をもらはれる直前でありましたけども、その時に小堀さんが、三高が無くなるについて、あんたの意見を書いてくれと言はれて、それが三高が無くなる時、即ち二十五年の三月三十一日の解散会の席上、小堀さんの手で、それを代読されたのであります。その中で湯川さんは「自分は一中の時代から三高にかけて、校長は森外校長だったけども、いささか神経衰弱気味で、あまりいい生徒ではなかったやうな気がする。しかし、今になって考へて見ると、その時代こそ、私が人間的に一番成長した時ではなかったかと思って居る。」かういふ事を書いて来られたので、これは会報の復刊第一号、五十一年ですから昭和二十六年の始めに出てをりますが、それをご覧いただければわかるかと思ひます。

◇ 嶽水會

発足当時の京都大学についての私の欲求不満はこれくらゐにして、最後に少しだけ終戦後の私が生徒課をやってをりました時に、生徒がどんな事をしてをったかといふ事を述べて見ませう。一般にはみんな苦労して居りましたが、一方で思想運動やなんかで、狂奔して居る生徒諸君が居

りました。ただ、奥田先生が総長をして居られた昭和四十三年から四十五年に亘る、所謂学園紛争といふものとは非常に違ってをりましたのは、学生運動をする学生諸君の所属が単一であったことであります。しかも、その生徒諸君も一方で学校を目の仇にしながら、他方では、自分等がいくら騒いでも、最後の所は学校が何とかしてくれるわいといふ、良く言へば学校に対する信頼でありますが、ちょっと意地悪く考へますと、一種の甘えみたいなものがあったやうであります。さういふ学生が一部分をりましたけれども、多くの三高生は文化部とそれから運動部に分れて、非常に活発な課外活動をして居るので、ここに二十三年のプリントがありますけれども、ごらんの如く文化部は非常に数が多くて三十ばかりあります。雑誌嶽水編集部から、弁論部、文芸部、ＥＳＳ、ゲルマニア協会、フランス協会、社会科学研究会、キリスト教研究会、カトリック研究会、仏教研究会といふものから、音楽部、物理班、化学班、生物班、数学班といふ、その他農学研究班とか、歴史班とか、いろいろの会がありまして、これがそれぞれ部員を持ってをります。合計しますと、登録した人数でありますが五百十八名あります。

それから運動部が十三〜十四ありますが、野球部、水上部、ラグビー、陸上、テニス、水泳、バスケット、バレーボールというふうに、山岳部、ホッケー部といふやうな、これも部員総数が三百三十七名あります。もちろんこの文化部の方、例へば能楽研究会に入ってゐて、陸上をやってをったといふやうな二足草鞋をはいてゐる生徒も居りますから、これが絶対数といふわけには

行きませんけども、単純にたし算をしますと八百五十五名といふ、その当時の三高生の数が、これもサボって学校へ出て来なかったのも皆入れまして、千百五十六人といふんでありますから、だいたい74％の生徒が何らかの部活動に携はってをったといふ事になります。これ程終戦後の、あの食ふ物もろくに食はないで、しかもかういふ文化活動、それからスポーツ活動をやって来たといふ事は、これはまことに、ここに三高生の偉さといふものが示されてゐると思ひます。これは教師共が手をこまねいてゐたんではなくて、先生方が動員中にあちこちで、卓球の練習をしたと見えまして、卓球をやる先生が約半数居られます。二十人近く居られまして、ある時に生徒と、これは主として寮生でありますが、生徒と教師の卓球の交歓試合といふのをやりました。十八組やりまして、10対8で生徒が勝ってゐます。その先生の名を見ますと、山修を始め、吉川泰ちゃん、小堀、阪倉（これは篤義君ですね）、それから羽田君とか、あるひはこんな人がやれるのかと思はれるやうな人がやって居られて、その中でも田川君とか、石川ツェー・ハー氏とか、それから石田君といふ英語の先生、これがまた達人でありまして、かういふ人が卓球をやって居られたものであります。　又、ある時は、これは三高が無くなる直前でありますけれども、無名会といふこれは生徒の中で多額納税会の連中のグループのやうでありますけれども、それが教師に野球の試合を申し込んでまゐりまして、これもやりました。これも7対7で仲良く引き分けました。かういふ次第でありまして、非常に短かい間ではありましたけども、みんなで、文化的又は体育

三高嶽水會文化部

昭和二十三年度

文化部長 古松教授

部名	部長又顧問	幹事	部員數
嶽水論辯部	古松教授	田中義三 LII-B	8
辯論部	上田講師	宮脇修 LII-A	20
文藝部	古松教授	桑原昭 LIII-A	20
E.S.S.	深瀬教授	五味和夫 LIII-A	10
ケルマニヤ協會	内山教授	平川千里 SII-1	100
フランス協會	伊吹教授	村田良平 LII-B	13
社會科學研究會	武藤教授	山本英二 LI-C	30
キリスト教研究會	武藤教授 三谷教授	小島次郎 LII-3	20
カトリック研究會 (未定)	山内教授	柳田侃 LII-B	30
佛教研究會	池田教授	近藤公一 LII-B	20
造型美術部	高安教授	平野牧三 LII-C	30
音樂部	吉川教授	谷啓輔 LII-B	20
物理班	藤田教授	村田良平 LII-B	13
化學班	吉井教授	谷口一郎 LII-B	15
生物班	佐藤三郎教授	田中寛 LII-B	20
數學班		高山宗一郎 SII-2	
能樂研究班	藤田教授	中川康昭 SII-2	20
歷史研究會	中山教授	荷田嘉一 SII-6	15
唯物論研究會	加古教授	下川英雄 LII-1	20
演劇研究會	伊吹教授	佐々木孫 LII-3	15
生活研究會	深瀬教授	飯尾要 LII-4	15
哲學研究會	自治指導教授	高原奇明 LII-1	30
民主主義科學者協會	上田講師	加納重朗 LII-B	22
	(未定)	佐々木孫 SII-3	17

部名	部長	主將	理事	部員數
野球部	生島教授			
水上部	西田・			
蹴球部	加古・			
陸上部	久米・			
庭球部	藤田・			
水泳部	(本尾・)			
籠球部	加古・			
排球部	桑垣・			
ホッケー部	中山・			
サッカー部	村上・			
山岳部	吉井・			
卓球部	石川・			
送球部	古松・			

三高嶽水會運動部

昭和二十三年度

運動部長 阪倉教授

部名	主將	理事	部員數
野球部	嶋村隆次 SII-3	新田益也 LII-B	25
水上部	矢倉福三郎 SII-1	高柳龍芳 LII-B	20
蹴球部	堀田鉄也 SII-4	真継隆男 SII-4	35
陸上部	村上和義 SII-5	長谷川周史 SII-6	24
庭球部	今永謀三郎 SII-3	森忠次 SII-4	20
水泳部	脇本三郎 SII-3	田浦弘保 SII-2	29
籠球部	西谷裕 SII-5	深海浩 SII-5	22
排球部	小山登 LII-B	鮎川浩介 SI-1	20
ホッケー部	閑本毅 LII-B	小林昭 SII-3	22
サッカー部	片山榮三 SII-3	蓑田成彦 SII-1	20
山岳部	高橋太郎 LII-C	小川幸一 SII-6	19
卓球部	沖島全 LII-B	岡本彰 SII-4	19
送球部	中村輝男 SII-3	和田晴雄 LII-B	17

的な活動をしてをったのであります。特筆すべき事は、二十二年と二十三年に一高戦を復活しまして試合をやっとるんでありますが、二十二年は四部完勝をやる一歩手前で、ちょっと事故がありまして、ボートで蛍谷のカーブの所で事故があって三高の艇が大まわりをした為に、惜しくも敗れたといふ事がありましたが、その翌年の二十三年には、四部が全部勝ちまして、三高の歴史では比較的珍しい四部完勝といふ事をやったのであります。ま、そんなやうな事がありまして、一方では、学校が無くなるといふ非常に暗い悲しみの中を、みんなが勇気を出して一生懸命で元気を出してやってくれたといふ事もあるわけです。

さて、三高の終焉といふものは、実は一寸複雑であります。先づ二十四年の三月に、一修の即ち二十三年に入学した三高生は、一年のままで新制へ移って行きます。それから二十四年卒業の諸君も、もちろん三月三十一日で三高を去ったのでありまして、二十四年の四月一日からは三年生だけが後へ残るわけです。これが全部で四百人ばかり、二十五年卒業の諸君は、文科百五十七名、理科が二百六十三名、合計四百二十名であります。三高の定員といふのは、文科百六十人、理科百六十人で、三百二十人でありますが、戦争中に理科を増募したりしまして、一番多い時は、理科が八組位あったさうでありますが、それが形の上だけでありまして、それらの諸君は大部分が学徒動員に、学徒動員といふんですか、各地の工場や事業場に出て行きまして、働いてをったのでありまして、落ち着いて勉強出来るやうになったのは、二十四年卒業の諸君が、私が丁度、

京都へ帰って来ました時に、二十一年九月から勉強出来るやうになったといふ事と、それから二十五年の諸君は比較的三年間まともに勉強が出来たやうであります。ただこの間に軍学徒といふのがありまして、軍隊とか士官学校とか、少年航空隊とか、あるひは海軍兵学校とか、士官学校とか機関学校とか、さういったやうな軍関係の学校に入って終戦を迎へて、そして出て来たといふのは、途中で、追ひ出されたと言ひますか、その諸君を収容するために、全国の高等専門学校でその定員の10％迄は入れてよろしい、これもですね、軍学徒が例へば三百人をりますと、その三百人を一遍に三高で引き受けるなんて事になるとえらい事になるといふのでだらうと思いますが、各地の学校に分散収容する事を許され、それから満州に新京大学であるとか、奉天に有名な医科大学、旅順に工科大学であるとか、高等学校などがあり、あるひは、台湾とか朝鮮半島にも、さういふ大学専門学校がありまして、さういふ所の学徒も、志願詮衡する事によって、これも10％迄はとってもよろしいといふので、さういふ諸君が、三高の教育といふものを、ほんの短い間ではありましたけども、満喫してくれる事が出来たといふ事も、我々としては非常な喜びであります。

◇　終　焉

最后に解散式の話で終る事にします。二十五年の一月二十六日か二十七日に、卒業試験、三年

生の卒業試験が終ります。卒業試験が終りますと、その日の午後豫餞会といふのを、学校の主催で新徳館で開く事になって居りますが、この年は、物資不足の時でありまして、どうやったらええか、恒例の紅白の饅頭が作れないわけです。これは多分芋あんだったんじゃないかと思ひますけども、寺町二条に、我々が学生時代にずうっと行ってをった鎰屋といふ、非常に立派な和菓子の老舗がありまして、その鎰屋の主人が、鎰屋には男の兄弟が三人か四人おりまして、そのうちの三人が三高を出たと思ひます。そのうちの一番下の四郎君といふのが、当時の鎰屋の主人でありまして、その四郎君に談じ込みましたところが、「よっしゃ。」と言ふので、昔の紅白饅頭には比べる事が出来ませんけれど、とにかく徽章の判を押した紅白の饅頭を、諸君の卓上に供へる事が出来たのであります。島田校長先生の送別の辞といふのは、これも創刊号に出てをりますけども、非常な名文であります。この雑誌は合本にして会館に陳列してありますので、ご覧いただいたらいいかと思ひます。ですから一月二十七日に生徒がみんな

校銘板降下。しめやかな春雨を背に。

出て行ってしまいますと、三高はもぬけの殻になるわけであります。

それから後は残った教師も島田校長はじめ旧い三高先輩方、即ち山修、深瀬、古松、それから石川さん（三高ではないですけど）とか、私と相前後する羽田君とか、村上君とか、阪倉君とかいふやうな者が毎日のやうに校長室の隣に事務官室といふのがありまして、その事務官室を校長室にしまして、そこに島田先生がをられまして、そこへみんな集まって、まあお通夜みたいな日が約二ヵ月近く続いたわけであります。

三月三十一日に、丁度天気が悪くてショボショボと雨が降り出した頃に、解散式といふのを新徳館でやりました。これらの事も古松氏が、非常な名文で残しておられます。それが終りまして、玄関の所へみんな集まり、玄関の左脇に掲げてありました高橋是清大先輩の書かれた「第三高等学校」といふ校銘板を島田先生が降されました。

その後そこで「しづかに来れ」と「紅もゆる」を歌ひ、今度は小雨の降るグラウンドへ集まりまして、大かがり火を焚いて、これはもう小使さん達が一生懸命になって集めてくれた、あるひはこの中には焼けた寮の残骸も入って居ったかも知れんと思ひますが、それを囲んで全国から集まった三高生と先輩方、それから三高の終焉を惜しむ京都の方々が集まって下さって、最後のフアイヤーストームをやったのであります。「序歌」に始まって、「行春哀歌」それから「我は湖の子」「紀念祭歌」「春東山の」「覚醒の歌」最後に「紅もゆる」というふうに、前回私がアルバム

を持って来まして、ここで皆さんにお目にかけましたがその時の写真が残ってをります。

もし興味のある方はあとで見て頂けると有難い。だんだん雨が強くなってまいりまして、その晩の十二時に、門柱にかけてあった「第三高等学校」と小さい木の門標でありますが、これを降しまして、これが三高の最後といふ事になったわけであります。私が官舎に居りましたので、門標降下の後教官が十名ばかりと、有志の諸君がやはり十名ばかりと併せて二十人位が官舎へ集まりまして、官舎で又火を焚いて、夜通し、三高のお通夜をしたのであります。

母校の送火。野球場でのファイア・ストーム。

えらい大急ぎでございましたが、最後に結びを申し上げなきゃならんですけれども、このあひだ六月二日に折田先生の追悼会みたいなものが、この会場で持たれまして、折田先生のご遺族や、三高の有志が集まりまして、折田先生を偲んだのであります。その時に九州にをられる松延慶二君といふ、昭和十二年文甲を出られた同窓生で、折田先生が留学してをられたスタンフォード大学を出てをられる松延君も、折田先生についてのいろいろの憶出なんかを話されました。松延君

といふ人は、この時初めて名前も聞いて、挨拶もしたのでありますが、この人の三高オンチぶりたるや、我々はとても足元にも及ばんほどの熱烈な三高礼讃者でありまして、かういふ方が、まだ遠く離れた地にも居られるのかと、私は非常な驚きと感銘を覚えたのであります。世界の各地にかういふやうな方が、もう今は我々の心の中だけにしか生きていない三高の事を愛し続けてをられる熱心な方が沢山居られるといふ事を、私は非常に力強く感じたわけであります。

どうも、元々話が下手で、意を尽せないところが多分にありましたけれどもこの辺で長談義を終らせてもらひます。私はもう京都で蟄居してゐるだけでありますから、今はあまりここへもおじゃまする機会はありません。何かまたございましたら僕の知ってゐる限り、僕のメモ帳にある限りは、お話してまゐりたいとかう思ってをります。長い間ご静聴ありがたうございました。

（京都大学名誉教授）